
脳内デート

てんとう虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脳内デート

【Nコード】

N1733B

【作者名】

てんとう虫

【あらすじ】

毎朝同じ電車に乗る女の子に恋をして変な妄想をしてしまう高校生の話。

2番ホーム準急池袋行き3両目、後ろから2番目右側のドアの前、
そこが僕の特等席。

混雑した電車の中で、なぜかそこだけが毎日一人分ポツカリ空いている。

もう少し奥に行けば、手すりなどに寄り掛かり、らかな格好をとれなくわない

それでも、僕が毎朝こんな支えもなく狭苦しい場所に立つのは、彼女に会うためだ。

彼女は、毎朝登校する時、決まってここの隣の手すりの前で外を眺めている

年齢はおるか名前さえも知らないが、あの制服は多分有名なお嬢様学校の物だろう

都内で1・2を争うバカ高校に通う僕とは、住む世界が違う人だ。

2回ほど目が合うことがあったがきつと「バカ校の男子がいる」「ぐらいにしか思っていないだろう

もしかしたらそれさえも思っていないかもしれない、

彼女にとつたら僕は、空気みたいな存在なんだろう……。

だから声は、絶対にかけない

いや、こんな傍聴者のいる中で、声をかけられるほどの度胸を僕は、持ち合わせていない

けれど毎朝彼女の外を眺める横顔に、綺麗な黒髪に、心臓を大きく動かしているのも事実だ。

その想いは、日を追うごとに強くなっていった。

彼女を見続けてから2週間後、頭の中で彼女に話しかけるシュミレーションを試してみた。

その中の『彼女』は、笑顔で僕の言葉の受け答えし、携帯のアドレスまで交換する。

その日から僕と『彼女』の関係が始まった。

僕が電車に乗ってから彼女が電車内に居る時間は、非常に少ない

それと比例するように『彼女』と会える時間も少ない……。

だんだんこれだけじゃ物足りなくなってきた僕の頭は、さらに過激を増し、

1ヶ月がたつ頃には、『彼女』とデートをして

2ヶ月目に入ると僕たちは、恋人になっていた。

今では、『彼女』とのデートは、日課になり毎朝手をつないで電車に乗っている。

しかし、冬休みに入り、特に部活などにも入っていないなかった僕は、

電車に乗る機会も無く『彼女』会えない日々が続いた。

それが僕には、耐えられなくて1月の始め頃、いつもの電車に乗り『彼女』の会いに行った。

けれど『彼女』がいるはずが無く、そのまま死んだ魚のように終点まで流されていった。

人の流れに乗って改札口まで歩く、

他人から見ればひよろひよるとジグザグ歩行をした変なヤツだったかもしれない。

あと3歩で改札口、のところで『彼女』とすれ違った

僕に気が付かなかったのか『彼女』は、僕の横をすり抜けて歩き続ける

「までよ！久しぶりに会ったのに！！」

夢中で『彼女』に駆け寄り肩をつかんだ

「は？あんた誰？」

怒った顔でこっちを睨み僕の手を振り払って行ってしまった。

目が覚めたような気分になる・・・。

どうやらやっぱり彼女にとって僕は、空気と同じ存在だったみたいだ。

(後書き)

何かよくわからない話になってしまいました。

『彼女』は、僕の創り出したもので彼女とは、違ふと思ってくれればわかりやすいかも……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1733b/>

脳内デート

2011年1月1日14時26分発行